

# 国語

(全18ページ)

## 注意事項

- 一 受験番号・氏名および解答は、すべて定められたところに記入しなさい。
- 二 問題用紙に解答を書きこんでも採点されません。
- 三、や「」などの記号は、特別の指示のない限り一字と数えます。

例

し	か	し	、	で	あ	る	。
---	---	---	---	---	---	---	---

一、次の各問いに答えなさい。

問一 次の〃——線部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

- ① ボウハン用品を設置する。
- ② 駅のコウナイで電車を待つ。
- ③ 店の経営を息子にユダ<sub>むすこ</sub>ねる。
- ④ 科学の進歩の功罪。
- ⑤ 姉はいい度胸<sub>どくちゆう</sub>をしている。

問二 次の①～⑤の意味に合うことわざ・慣用句を、後のア～コの中から一つずつ選び、記号で答えなさい（ただし、同じものは二度使えない）。

- ① もめごとが起こったあとは、かえって安定すること。
- ② 指示を出す人間が多すぎて、物事がうまく運ばないこと。
- ③ 苦しいときには、何にでも頼<sub>た</sub>ろうとすること。
- ④ 他人には重大なことでも、自分には何の関係もないこと。
- ⑤ 冷たく人をあしらうこと。

問三

次の①～⑤の類義語を、後の□内から選び、漢字に直して答えなさい。

- |           |                 |
|-----------|-----------------|
| ア 木で鼻をくくる | イ 言わぬが花         |
| ウ 頭角をあらわす | エ 船頭多くして船山に登る   |
| オ 対岸の火事   | カ 雨降って、地固まる     |
| キ 他山の石    | ク おぼれる者はわらをもつかむ |
| ケ 小耳にはさむ  | コ どんぐりの背比べ      |

- ① 感心
- ② 便利
- ③ 利害
- ④ 不在
- ⑤ 傾向<sub>けいこう</sub>

けいふく	そんたく	ちようほう	ふうかく
ふうちよう	みんい	るす	

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本社会は、その人口が2008年にピークを迎え、高齢化も進んでいることで、それに伴うさまざまな問題点に直面しています。特に社会保障費が年々膨張してきて（図1）、これをどうするのかという課題がありますし、さらに人工資本基盤にまつわる課題があります。人工資本基盤というのは、たとえば、高度成長期に建てられたインフラのことで、それをメンテナンスする維持費が必要になります。水道もコストがかかりますので、それを民営化して、経済原理を利用して運営していかうという話も出てきています。こうした社会インフラの維持更新費は、これから人口減少が進んでいくと、それ自体が都市と地方の格差を生む要因になります。人口が少なくなる地方ほど、1人あたりの維持費が高くなるからです。

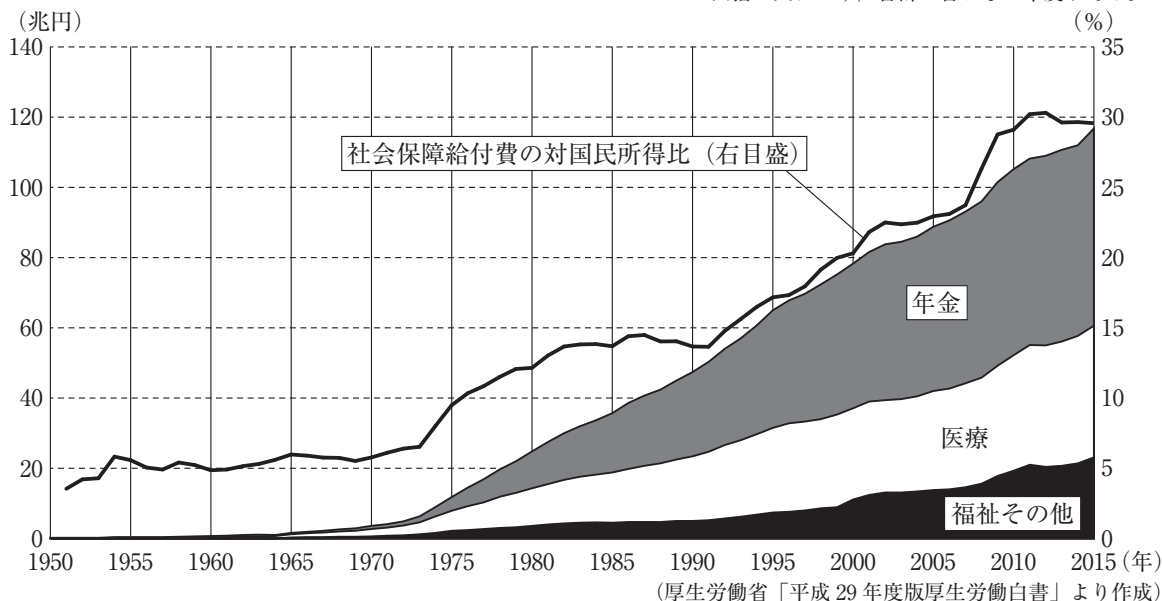
人口が減るからといってインフラは減りません。都市というのは花火のようなものです。人口が増える過程で都市は膨張します。そのまま、その規模を維持したまま薄くなっていくために、花火のようなものだというわけです。しかし、その過程で大きな問題点が生じますから、いかに計画的に町をたたんでいくのが重要なのですが、そうした制度化はなされていません。

さらに人が減っていくと、自然が豊かになると思われるかもしれませんが、<sup>②</sup>そうではありません。人の手が入って維持されていた農地や人工林では、間伐がされないために竹がはびこってきて、イノシシのねぐら

【図1】 社会保障給付費の推移

	1970年	1980年	1990年	2000年	2010年	2015年
国民所得額（兆円） A	61.0	203.9	346.9	375.2	361.9	388.5
給付費総額（兆円） B	3.5	24.8	47.4	78.3	105.4	114.9
（内訳）年金	0.9	10.5	24.0	41.2	53.0	54.9
医療	2.1	10.7	18.6	26.2	33.2	37.7
福祉その他	0.6	3.6	5.0	11.0	19.2	22.2

※四捨五入により、合計の合わない年度がある。



になっていきます。人が減ると、これまで人が維持してきた農地、人工林といったものの質が劣化していくのです。林業従事者は実は最近増えている、林業に若者が入ってきています。とはいえ、全体として見ると1980年に比べて3分の1になっているのです。こういう状態では、とても日本の人工林を維持するほどの林業者はいません。

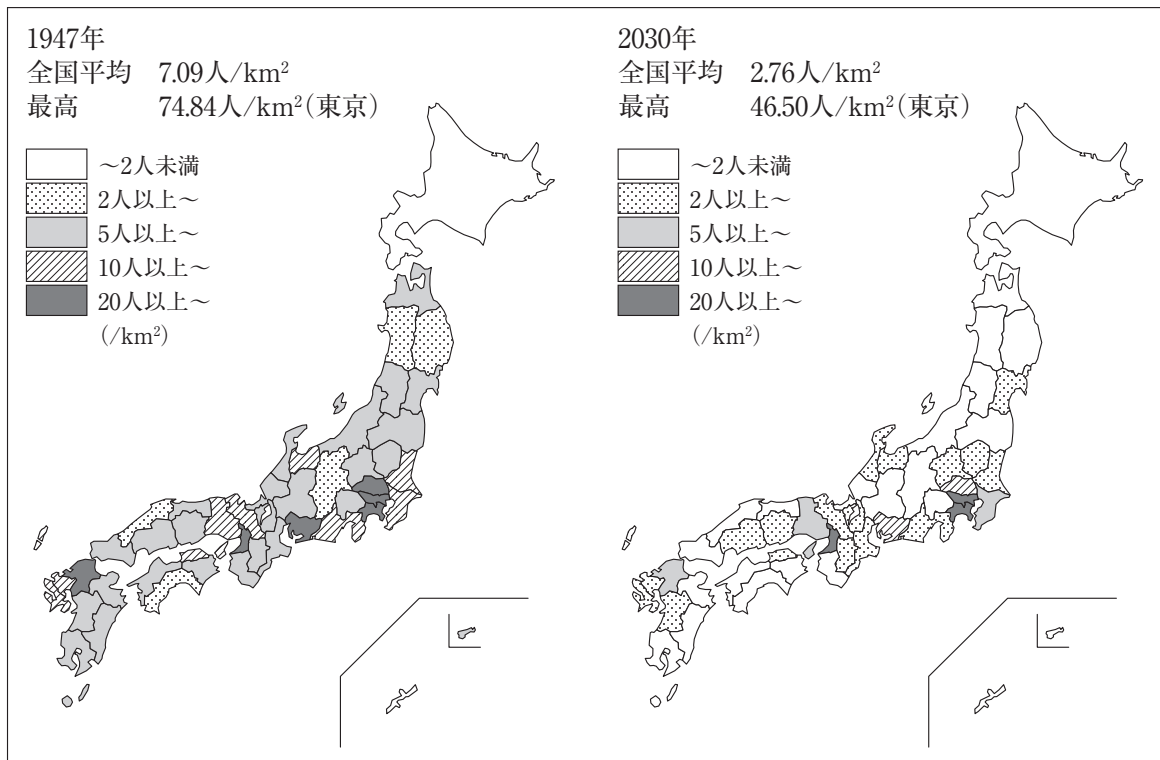
有害鳥獣を駆除する人も減ってきていますし、高齢化しています。その一方で、人の手が入らなくなったために、イノシシ、シカ、クマといった有害鳥獣の捕獲数はどんどん増えている。鳥獣保護法が鳥獣保護管理法になりました。保護するだけではなくて生息域を狭めて、個体数を減らすことが目的です。そういうことも環境省の役割になってきています。わたしは環境省に11年いたのですが、その頃は思ってもみなかったことです。今では環境省のエコライフ・フェアに狩猟体験ブースがあり、バーチャル狩猟体験のようなことをやっています。③ そういう状態になるとは、当時は全く考えてもいませんでした。

農業についても、基幹的農業従事者の平均は65歳を超えています。④ となると耕作放棄地が今後増えていくことでしょう。

このように人の手が入らないことによって、生態系の質が劣化していることは国も認識しています。人間活動の縮小による危機のために、里地や里山が維持できないのです。そのために、2010年に生物多様性締約国会議が名古屋で開かれた時に、里山イニシアティブということを日本から発信しました。

さらに社会関係資本基盤についても、人と人との関係性が薄れていっ

【図2】 日本のおともだち密度



※国立社会保障・人口問題研究所『都道府県別将来推計人口（平成14年3月推計）』をもとにしている  
（千葉大学教授 大石亜希子作成）

ています。図2を見てください。「日本のおともだち密度」というものです。それは、歩いて行ける範囲に新生児がどの程度いるのかを調べたものです。それによると、1947年には全国平均で7人いました。2030年には全国平均が2.76人になります。1を切るような自治体もあります。歩いて行ける範囲に幼馴染おともだちがない。このような世の中になってきているのです。

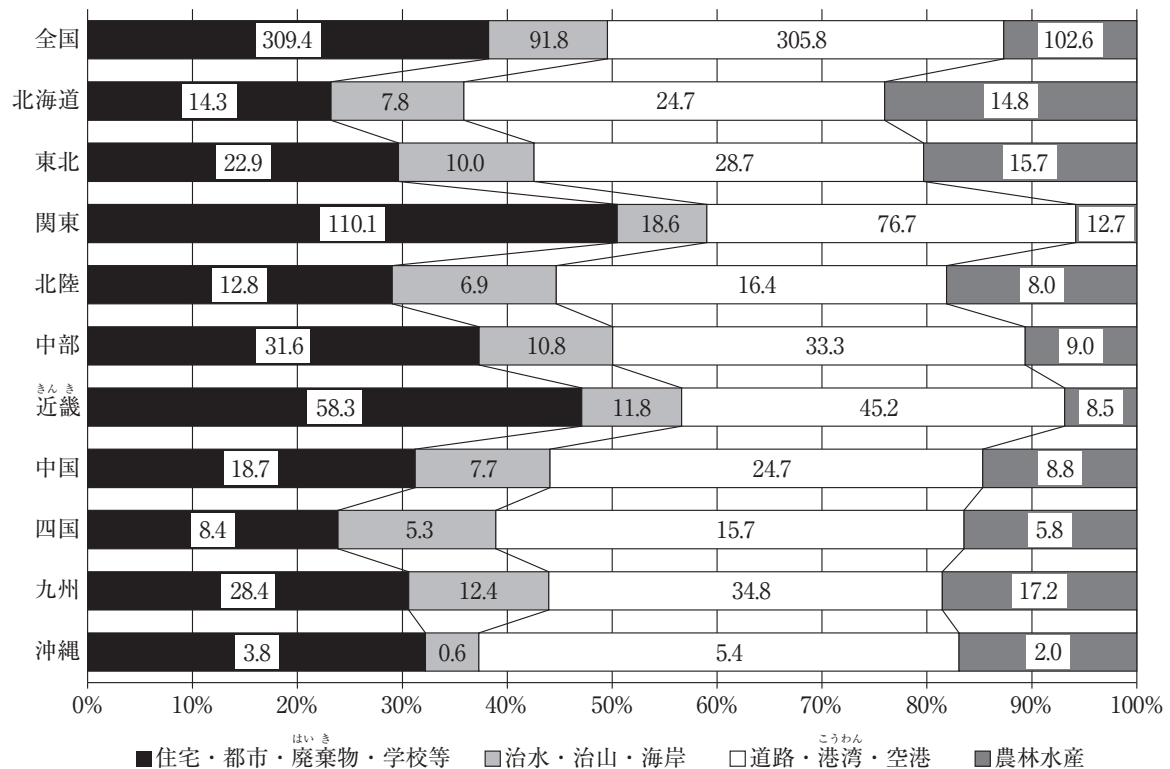
さらに世帯数の構成について見てみましょう。社会保障・人口問題研究所の予測では、お一人様世帯が2030年には37.4%になります。家族でなんとか介護かいごしてくれ、施設ではお金がかかるから介護はできないといっても、家族自体がないのです。そういう世の中になっていくということです。

こういった問題を総称そうしょうすると、人口減少社会において資本基盤の手入れができなくなる課題ということになります。

人口減少下における資本基盤は四つあります。人的資本基盤、自然資本基盤（しぜん）、人工資本基盤（もの）、それから社会関係資本基盤（しくみ）です。ここでは「基盤」という名前をつけています。たとえば単なる「資本」という言葉を使うと、どうしても増殖ぞうしょくするようなイメージがありますので、それはやめました。※7 宇沢弘文先生が提唱された「社会的共通資本」からヒントを得て、資本という言葉を使って、新しい用語として「資本基盤」と言っています。こちらのほうが、より実体的なものだということがわかるかと思えます。

この資本基盤は、状況じきょうに応じて手入れをしないとダメです。この

【図3】社会資本ストックの地域別・分野別内訳



(内閣府経済財政担当「都道府県別経済財政モデル・データベース（平成29年度版）」より作成)

④ 手入れ労働がどれだけ必要なかは、手入れの対象の状態を見ると、だいたいわかります。農地、人工林、介護しないといけない高齢者、あるいはインフラの状態、そういったものの状況に応じて手入れ労働の必要数はだいたいわかると思います。そういうものがきちんと充足<sup>じゆうぞく</sup>できているのかどうか人口減少下における大きな課題となります。

手入れ労働については専門的な議論が必要です。それは大量生産できないので、儲<sup>もつ</sup>けることができないのです。典型的処理を大量に行うことができません。したがって、他の労働市場の中で、工場やITといったものと競争すると絶対に負けてしまうのです。ですから今の有効求人倍率を見ると、手入れ労働に当たる職種では、すでに人手不足<sup>じんずく</sup>が顕在化<sup>けんざい</sup>してきています。

人口が減<sup>く</sup>る中で完全雇用<sup>ぜんぜんこよう</sup>というのは当たり前です。人がいなくなるわけですから、完全雇用は当たり前で、さらに完全手入れを目指さないといけないと思うのです。

※<sup>10</sup> エコロジカル経済で議論<sup>ぎろん</sup>されている、ファン<sup>ファン</sup>ド・サービ<sup>サービ</sup>ス資源<sup>じゆん</sup>とストック・フロー資源という分け方があります。これはどういうものかという、昼にハンバーグ定食<sup>たの</sup>を頼<sup>たの</sup>んだらハンバーグが出てきた。そのハンバーグに物質的に対価<sup>たいか</sup>しているようなもの、たとえばひき肉やガスの火力は、これで言うと、ストック・フロー資源になります。ハンバーグ定食が出てくるにあたってはコックさんが必要で、フライパンも必要です。コックさん、フライパンというのはハンバーグ定食の中に入っ

きません。しかし、それはハンバーグ定食を提供するにあたって必要なものですので、ここで言うと、ファン<sup>ファン</sup>ド・サービ<sup>サービ</sup>ス資源<sup>じゆん</sup>にあたります。

※<sup>13</sup> こういったファン<sup>ファン</sup>ド・サービ<sup>サービ</sup>ス資源<sup>じゆん</sup>とストック・フロー資源<sup>じゆん</sup>というのは、ニコラス・ジョージエスケ<sup>ジョージエスケ</sup>||レーゲン<sup>レーゲン</sup>からハーマン・デイリー<sup>ハーマン・デイリー</sup>といった研究の流れの中で捉<sup>とら</sup>えられてきました。けれども、ストック・フロー資源という用語の中に、ストックとフローの両方が入っていてわかりにくいので、新しい名前をつけました。つまり、ファン<sup>ファン</sup>ド・サービ<sup>サービ</sup>ス資源<sup>じゆん</sup>が資本基盤<sup>とくちゆう</sup>で、ストック・フロー資源は通過資源<sup>とくわうじゆん</sup>だと呼びます。資本基盤と通過資源のふたつによる経済理論<sup>けいぎりろん</sup>を考えることが必要<sup>ひつやう</sup>だというわけ

です。資本基盤<sup>とくちゆう</sup>の特徴<sup>とくちゆう</sup>ですが、コックさんでもフライパンでも、どちらにも有用性<sup>ゆうようせい</sup>をもたらすメカニズム<sup>めかにずむ</sup>が内在<sup>ないざん</sup>しているわけです。けれどもそれが持続<sup>じぞく</sup>できなくなる、継続<sup>けいぞく</sup>できなくなる閾<sup>い</sup>値<sup>いち</sup>が存在<sup>そんざい</sup>します。過労死<sup>くわらうし</sup>するかもしれないし、フライパンも手入れしなければ錆<sup>さび</sup>びついでしまうかもしれないし、使えなくなるような状態<sup>じょうたい</sup>になると、そのシステム<sup>しすてむ</sup>が有用性<sup>ゆうようせい</sup>をもたらすメカニズム<sup>めかにずむ</sup>は継続<sup>けいぞく</sup>できません。そのような閾<sup>い</sup>値<sup>いち</sup>に至<sup>いた</sup>ることなく、有用性<sup>ゆうようせい</sup>を提供<sup>ていきょう</sup>し続けるようにするためには、手入れ労働<sup>ていれらうどん</sup>やケアワーカー<sup>ケアワーカー</sup>が必要です。こうしたメンテナンス<sup>メンテナンス</sup>を投下<sup>とうか</sup>すれば、資本基盤<sup>とくちゆう</sup>はより長い時間<sup>じかん</sup>使用<sup>しゆじゆ</sup>できるようになり、単位時間<sup>たんゐじかん</sup>当たりのサービ<sup>サービ</sup>ス提供量<sup>ていきりやう</sup>を増やすことができます。

これは生産<sup>ちゆうさ</sup>とは違う<sup>ちがう</sup>ということです。生産<sup>ちゆうさ</sup>というのは、新しいサービ<sup>サービ</sup>スを創造<sup>ちゆうぞう</sup>する活動<sup>かつどう</sup>です。手入れというのは、すでにある資本基盤<sup>とくちゆう</sup>の有用

性を持続させるために必要な労力です。これは、これまでの経済学で考えていた生産ではなく、新しい概念としての「手入れ」です。このことを認識する必要があるのではないのでしょうか。

(中島隆博『人の資本主義』より 一部改変)

- ※1 インフラ……道路・鉄道・上下水道・病院など、生活や産業などの経済活動を営む上で不可欠な社会基盤。
- ※2 コスト……費用。
- ※3 エコライフ・フェア……環境問題について、楽しみながら学んだり体験したりするための催し。
- ※4 バーチャル狩猟体験……現実そっくりな仮想の世界で狩猟を体験すること。
- ※5 基幹……物事の基盤や中心になること。
- ※6 里山イニシアティブ……土地と自然環境を最適に利用・管理し、人間と自然環境の持続的な関係を再構築しようという取り組み。
- ※7 宇沢弘文先生……日本の経済学者。一九二八〜二〇一四。
- ※8 顕在化……隠れていたものがはつきりすること。
- ※9 完全雇用……経済学の用語のひとつで、働くことを希望する者のすべてが雇用される状態のこと。
- ※10 エコロジカル経済……地球の生態系と経済システムの関係性を総合的にとらえようとする経済。

- ※11 ファンド・サービス資源……使用されたとき、物質的に変形されずに繰り返し使用できる資源。
- ※12 ストック・フロー資源……使用されたとき、物質的に変形して後に残らない資源。
- ※13 ニコラス・ジョージエスク||レーゲン……経済学者。
- ※14 ハーマン・デイリー……環境経済学者。
- ※15 ストックとフロー……ストックは、蓄え。フローは、流れ。
- ※16 閾値……境界となる値。
- ※17 ケアワーク……失われた能力を支える働き。

問一

——線部①「計画的に町をたたんでいく」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人口増に伴って新設した水道、ガス管、道路などの生活インフラを、人口減に応じて古いものから撤去てきまよしていくこと。
- イ 人口が増える過程で膨張した都市の規模を維持するために、住民を都市の中で計画的に分散させて居住させること。
- ウ 都市の人口減少を食い止めるために、他の都市との合併がっぺいを行って規模を大きくし、新たな住民を呼びよせること。
- エ 人口が増加する過程で膨張した都市を、方法や手順を考えながら、その規模を人口減に伴って縮小していくこと。
- オ 少子化に伴う都市の人口減は明白なので、生活に必要な水道、ガス管、道路といった一部のインフラを整備していくこと。

問二

——線部②「そうではありません」とあるが、筆者は自然環境についてどのような述べているか。それについて説明した次の文の□にあてはまる言葉を、本文中から二十七字で探し、最初と最後の五字をそれぞれ書きぬきなさい。

農地や人工林などの自然環境に□ようになる。

問三

——線部③「そういう状態」になったのはなぜか。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 有害鳥獣を駆除する業務に従事する人の数が少なく、林業に比べて知名度も低いので、環境省は、狩猟体験の面白さをイベントによってたくさんの人に広めようとしているから。
- イ 狩猟体験のイベントを通じて、有害鳥獣の駆除に従事する人の働きぶりを紹介し、彼らの労働環境を少しでも改善することが、環境省の果たす役割のひとつになっているから。
- ウ 有害鳥獣を駆除する人が減少し、高齢化も進んでいる状況に對して、有害鳥獣を保護するだけでなく、生息数を狭めて管理することも環境省の役割となってきたから。
- エ 環境省は、有害鳥獣の急増により駆除する人が不足している状況を打開するために、野生動物によって荒らされた里山の現状を、駆除に否定的な人へ向けて紹介しているから。
- オ 有害鳥獣の駆除方法について、正しい知識をもっている人が少なくなったので、環境省は、素人が行う駆除が環境破壊はかいになっあっていることを狩猟体験によって発信する必要があるから。



問四

——線部④「手入れ労働」について、筆者はどのような労働であると考えているか。次の文の□にあてはまる言葉を、「手入れ労働」を要する職種の抱える課題と、「生産」との違いを明らかにして八十字以内で答えなさい。

手入れ労働とは、□労働である。

問五 本文を通して筆者が述べていることとして最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人口減少社会における日本は、社会保障給付費と人工資本基盤のメンテナンス費の適切なバランスを、「資本基盤」「通過資源」という経済理論の面から考えていく必要がある。
- イ 人口減少社会における「資本基盤」の問題は、日本だけではなく米国も同様で、それぞれの経済学者が取り組んできたが、その研究結果をもとにして専門的な議論を進めるべきだ。
- ウ 四つの「資本基盤」の中でも、特に「自然資本基盤（しぜん）」は人間が安全、安心して暮らせる環境に直結する重要なものなので、適切な「手入れ」を行っていく必要がある。
- エ 人口の減少が避けられない日本は、社会インフラの維持に多額の費用と労働力の拡大が求められており、社会保障給付費の増加と人手不足を率先して解決すべきである。

オ 人口減少社会において問題になるのは、資本基盤への十分な

対応であるが、資本基盤の状況に応じてどのような手入れ労働を行っていくのかを新たに考える必要がある。

問六 本文および【図1】～【図3】から読み取れる内容として正しいものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。解答順は不問とする。

- ア 2000年度と2010年度を比較すると、社会保障給付費の対国民所得比は10ポイント以上上昇しているが、国民所得額は10兆円以上減少している。
- イ 社会保障給付費の内訳を見ると、年金給付費より医療給付費の占める割合が高い時代もあったが、高齢化に伴って年金給付費の割合が徐々に高くなっている。
- ウ おともだち密度を見ると、1947年には7.09人だった全国平均は2030年に2.76人になる見込みで、平均が2人を下回る自治体は存在するが、非常に少ない想定である。
- エ 日本のおともだち密度は、1947年に比べて2030年では全国的に低下しているが、1947年におともだち密度が20人以上だった都府県では減少していない。

オ 地域ごとに社会資本ストックの分野別の割合を比べたとき、「道路・港湾・空港」の項目が「住宅・都市・廃棄物・学校等」の項目よりも低いのは関東地方だけである。

カ 社会資本ストックの特徴を地域別にみると北海道は全国に比べ、都市系や治水などの国土保全にかかわるものよりも、交通や農林水産系にかかわるものの構成比が高くなっている。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

合唱コンクールで指揮をすることになった中学生の早紀は、クラスメイトの岳が歌の練習に参加しようとしないうちに心をいためていた。

早紀は学校に向かいながら、ふうとため息をついた。

朝から浮かない顔をしていたのは、岳が自分のせいで、合唱コンクールに出なかつたらどうしよう、という心配が止まらなかつたからだ。

昨日の朝、早紀は体育館をのぞいた。でもそれは、岳を合唱に誘うためでも、なじるためでもなかつた。だけど、どうやら誤解されたということは、たぶん間違っていない。

岳はこう言ったのだ。

——俺、そっちには出ねえし。

そのとき、早紀は朝練のことを言っているのだと思ひ込んでいた。でも、晴美の話の話を聞くと、「そっち」というのは、合唱コンクール本番のことを指しているようにも、とれなくはない。

もし、わたしのせいで……。

早紀は学校への道すがら、ずっと同じことを考えていた。気づいたら、もう校門の前まで来ていた。一瞬立ち止まって、体育館に目をやる。

岳はもう来ているだろうか。

早紀は歩みを進めた。鼓動が速くなる。

① 体育館のわきをスローモーションみたいにゆっくり歩く。でも、体育

館からは何の音も聞こえてこなかつた。

……来ていない。

体育館だけではなく、校舎も校庭も中庭も、全てがまだ眠りから覚めていないようだった。

誰もいないだっ広い空間に、ひとりぼつりとしているような孤独感がわき上がってきた。ひんやりした風が首筋を通り抜けた。ブレザーの袖口を指を折ってつかんだ。

体育館を通り過ぎてしまうそのときだった。中から、ダンというボールの跳ねる音が聞こえた。

パツと振り返った。今度は、ダンダンと続けて音が聞こえた。早紀は走り出していた。

本当は岳が来ていても、体育館には顔を出すまいと決めていた。

これ以上余計なことはしない方がいいと、分かっていた。

それなのに、勝手に足が向かっていく。

昨日と違って、早紀はそつと近づくなんてことは、出来なかつた。夢中で体育館の入口まで駆け込んで、そこでようやく足を止めた。

岳が振り向いた。怪訝そうに眉をひそめている。その鋭い目に射られたように、心臓が縮みあがった。② 岳のこの視線の強さに、まだ耐性がな

い。

岳はボールを床に置くと、こちらに向かってきた。

金縛りにあったみたいに体がフリーズした。

いったい何のために、わたしはここにいるのだろう。

岳が目の前まで来た。

「何？」

昨日と同じ単語だった。黙だまっているわけにはいかなかった。

「合唱……コンクール」

小さなささやくような声は、背の高い岳の耳には届かなかったらしい。

「え？ 何て言った？」

岳は少し背をかがめ、早紀の方に片耳を寄せた。岳との距離きょりが近づく。胸むねが苦しい。

そのとき、あの香かおりがふわっと広がった。

すがすがしい爽さわやかさの奥底おくそこに広がる、蠱惑ごわく的な甘あまさ。

——シトラスムスクの香り。

早紀はそつと息を吸い込んだ。爪つめの先まで、香りがいきわたるようだった。

極度の緊張きんちやうがかすかに弛緩しかんした。

「合唱コンクール、休んだりしないよね？」

やつと言えた。

「何で？」

③ 岳は不思議そうに首をかしげた。その表情に、一気に力が抜けた。

早紀は仕方なく、晴美から聞いた話を持ち出して、心配になってしまったことを、ぼつぼつ打ち明けた。

「あいつ、ばっかじゃね」

岳は上体を起こすと、吹ふき出した。

「俺、まだ保育園児かよ。これでも無遅刻ちやくてく無欠席。合唱コンクールも休まないし」

ホッとしすぎて思わず目が潤うるんだ。なんでこんなことで涙腺なみせんが緩ゆるんでしまうのか、不思議だった。

⑧ 「にしてもよ。キンタのやつ、そんな昔の話出してきやがって。くそつ。

あ、でもこれでイーブンだな」

何がイーブンなのか、早紀には意味の分からないことだった。

ふたりの親密さ加減をつきつけられた気がして、忽然ごつぜんと現れたもやもやとした気持ちに、早紀はうろたえた。

⑪ フランクな感じになった岳は、話を続けた。

「でさ、どうなの、そっちは？ 指揮者だっけ。うまくいつてんの？」

「実は……。指揮だけじゃなくて、一部で歌も歌うことになって」

「らしいな」

岳が知っていることに驚おどろいた。

「自信ないんだ」

④ 誰にも言えなかった言葉が、ぼとんと床に落ちた。

「失敗してみんなに迷惑めいわくかけたらって思うと、怖い。わたしは音心おんこころみたいに、音楽の才能があるわけじゃないし」

聞き役に回っていた岳が、口を開いた。

「才能があるやつっていうのは、羨うらやましいよな」

岳はまるで誰かを思い浮かべるように、遠くゴールの方に目をやった。

「ちくしょー、うまくなりてえ」

いつも自信に満ちあふれているように見える岳が、他人のことを羨むなんて予想だにできなかった。

「でもさ」

岳は言葉を切ると、照れくさそうに鼻のあたりをこすった。

「俺たちにも才能、あるんじゃないか？」

早紀は弾かれたように、岳を見上げた。

俺たち？ 才能？

「めげない才能がさ」

「めげない、才能？」

瞬きを忘れたように、岳の目をじっと見つめた。

「自分よりすごいやつがそばにいても、差を見せつけられても、それでも絶対めげない才能」

⑤ 真面目に泣きそうになった。

「だいたいさ、こんな朝早くから練習するやつ、他にいる？ 自信持とうぜ」

岳がニツと笑った。早紀の頬もやっとゆるんだ。

「いいか、見てろよ」

そう言うと、岳は体育館の中の方に、ゆっくり歩いて行った。ボールを拾い上げると、その場でダンダンと二回ついた。

何をするかは分かった。

大切なものを愛おしむように、ボールを両手で持つ。岳が意識を集中させていくのが、ぴんと張り詰めた空気を通して、早紀にも伝わってきた。

た。

岳はゴールに向かって慎重に構えると、ふわりと体を浮かせた。ボールがゴールに向かって弧を描く。

⑥ シュポツという小気味よい音をさせて、ボールは網をすり抜けた。

(佐藤いつ子『ソノリテイ はじまりのうた』より 一部改変)

※1 晴美……早紀のクラスメイト。

※2 怪訝そうに……不思議で納得がいかなそうに。

※3 耐性……ここでは、慣れのこと。

※4 フリーズ……硬くなる、こわばる。

※5 蠱惑的な……たぶらかして迷わすような。

※6 弛緩……緩むこと。

※7 涙腺……涙をつくって出す器官。

※8 キンタ……晴美のこと。晴美の姓は金田なので、岳はキンタと呼んでいる。

※9 イーブン……互角、均等。

※10 忽然と……急に、突然。

※11 フランクな……遠慮がなくざつくばらん。

※12 音心……ピアノの伴奏を担当する、早紀のクラスメイト。

問一

——線部①「体育館のわきをスローモーションみたいにくつり歩く」とあるが、このときの早紀の様子の説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 岳はもう体育館に来ているはずだと思い、岳に合唱コンクールに出てほしいともう一度頼んでみようと考えている。

イ 岳が体育館で練習していると確信していたので、自分を誤解している岳に自分の本心を伝え、岳の誤りを指摘しようとしている。

ウ 岳はまだ体育館に来ていないとは思いますが、もし来ていたら、自分の心配事や孤独感を岳に打ち明けたいと期待している。

エ 岳が体育館に来ていたら、合唱コンクールに参加するか彼の本心を確認したいが、彼に会うことのためにためらいを感じている。

オ 岳はもう体育館に来ているかもしれないが、仮に来ていなかったとしても、しばらく様子を見ようと思っっている。

問二

——線部②「岳のこの視線の強さ」とあるが、早紀が、岳の「視線の強さ」を感じるのには、早紀の目には、岳がどのように映っていたからか。それについて説明した次の文の□にあてはまる言葉を本文中から十四字で探し、最初の五字を書きぬきなさい。

早紀の目には、□のように映っていたから。

問三

——線部③「岳は不思議そうに首をかしげた」のはなぜか。三十字以上四十字以内で答えなさい。

問四

——線部④「誰にも言えなかった言葉が、ぼんと床に落ちた」とあるが、この表現の説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 長らく隠されていた早紀の本音が、岳の説得によって引き出されていく様子を、「落ちた」という言葉で表現している。

イ 誰にも本音を打ち明けられずにいた早紀が、思わず言葉を口にしてしまった様子を、たとえによって印象づけている。

ウ 人前では弱音をはかないようにしていた早紀が、岳を信頼してつい話してしまった状況を、具体的に描写している。

エ 岳への思いを打ち明けることができた早紀の喜びと、岳への思いが通じて安心する心境を、「床に落ちた」と表現している。

オ 弱音をはかずにいた早紀が、岳に話したことを後悔する様子を、「ぼんと」という言葉で象徴的に描いている。

問五

——線部⑤「真面目に泣きそうになった」のはなぜか。早紀の気持ちの変化にふれながら、「自信」という言葉を必ず使って、四十字以上五十字以内で答えなさい。

問六

——線部⑥「シユポツという小気味よい音をさせて、ボールは網をすり抜けた」とあるが、本文における、この表現のもつ意味の説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 直接的には、投じたボールをゴールに入れる岳の技量を表現しているが、間接的には、岳の、誰にでも優<sup>やさ</sup>しく接して周囲から信頼されている人物像を表現している。
- イ 直接的には、岳の投じたボールがゴールをすり抜けたときの音を表現しているが、間接的には、岳と早紀の二人の気持ちを通じて強く結ばれたことを表現している。
- ウ 直接的には、岳の投じたボールがゴールに入ったことを表現しているが、間接的には、悩<sup>なや</sup>みが薄<sup>うす</sup>らいだことで前向きになった早紀の気持ちを表現している。
- エ 直接的には、ゴールに向かってボールを投じたときの岳の集中力を表現しているが、間接的には、自分のめげない才能に気づいた早紀の驚きを表現している。
- オ 直接的には、岳の投じたボールがゴールに正確に入ったことを表現しているが、間接的には、岳が早紀の悩みを言い当てたことを表現している。

四、次の資料Ⅰ～Ⅲと中学一年生のケイコさんが書いた意見文を読んで、後の問いに答えなさい。

【資料Ⅰ】

現在の世界人口は約77億人。国連によりますと2050年には97億人になると予測されています。これから人口が増えるのは主に途上国です。これら飢餓や貧困に苦しんでいる途上国の人たちも、日本のように食料や物があふれ、車や飛行機で移動するような恵まれた生活をしたいと願っています。

しかしいまの恵まれた生活というのは、石炭や石油などによるエネルギーを多く使う生活であるため、二酸化炭素を多く出すのです。いまから20億人以上も人口が増える中で、2070年頃には排出量を実質ゼロにしなければ、<sup>※1</sup>2度未満は達成できないのです（実質ゼロとは、人間活動が出す二酸化炭素の排出量と、森林や海洋といった生態系などが吸収する二酸化炭素の吸収量とを相殺して、実質ゼロにすること）。

みなさんはできると思えますか？

普通に考えるとできないと思いますよね。しかし、それをやらない限り、私たちは3度から4度上昇する世界に突入することになります。だからこそ、この問題は、未来を背負う若いみなさんも真剣に考える必要があるのです。

温暖化対策は先進国と途上国が鋭く対立しており、なかなか進みません。世界各国の置かれている経済状況や社会がすごく不平等だからです。

いま一番多く二酸化炭素を排出している国は中国、アメリカ、インド、ロシア、日本などで、約10か国で世界の排出量の約70%を占めています。つまり残りの国は世界の約30%しか出していないのです。

これらの途上国には人口が多い国もあります。排出量を人口で割って、1人当たりで見ると、その不公平さがよくわかります。

中国は1人当たり6・6トン、アメリカは14・9トン、日本はだいたい9トンです。アフリカ諸国平均でわずか1トン、インドは1・6トン。つまりインド人6人分の排出量を日本人1人で出していることになります。いまは1人当たり排出量というのは、国の生活レベルとほぼ比例しているのです、低い国ほど、食べ物も薬もなく、教育も受けられないような生活ということになります。

みなさんがもしこういった国に生まれたならば、当然日本人のような生活をしたと思いますよね。このようにそれぞれの国によって非常に不公平な状態に置かれているため、温暖化対策の交渉は対立しがちなです。

これを背景に、これまで途上国側は先進国側に温室効果ガス排出量の削減を強く迫ってきました。これまでに起きている温暖化は、18世紀末の産業革命以来発展してきた先進国が二酸化炭素を出してきたことが原因であり、先進国側の責任が重いことは明白だからです。

いまだ貧困や飢餓に苦しむ途上国が、まず開発を優先するのは当然の権利です。しかし、いまの先進国のような温室効果ガスを大量に出す生活を、途上国も含めて97億人がするようになったら、地球環境はどう



い持ちこたえられません。

しかも先進国側も、経済が停滞したり、自国第一主義の傾向が強まるなどの政治事情も相まって、なかなか温室効果ガスを削減できていません。さらに2000年以降は先進国と途上国との対立だけでなく、同じ途上国同士でも、中国やブラジルなど急速に経済発展した新興国と、いまだ貧困や飢餓に苦しむアフリカ諸国や小さな島国などの後発開発途上国との間で、意見が異なるようになってきました。国際交渉はすごく複雑化しています。

この世界には正解はありません。それぞれの国にそれぞれの事情があつて、それぞれの優先順位があります。その中で世界みんなで減らしていくとするためには対話を続けるしかありません。話し合つて、みんなのなかで共通項をもつて進めていくしかない。そのことをみなさんにぜひ一緒に考えてもらいたいと思います。

対立を極めた末に誕生したパリ協定<sup>※4</sup>には、これまでの国際交渉の失敗を糧にいろいろな仕組みが入っています。

最も重要なことは2つ。1つが先ほど説明した「目標達成は義務とはしない」、しかし「世界各国共通のルールで温室効果ガスの排出量を算定し、国連に報告して、お互いに監視する」仕組みでもつて、目標達成を促す制度です。

途上国を含めてすべての国が削減対策を行うために、主に先進国がお金を出して、途上国に技術を提供し、支援することも決まっています。

世界全体が協力して進めるためには、先進国が自ら大きく削減すると同

時に、途上国に省エネルギー技術などの導入を支援していくことが不可欠であるからです。

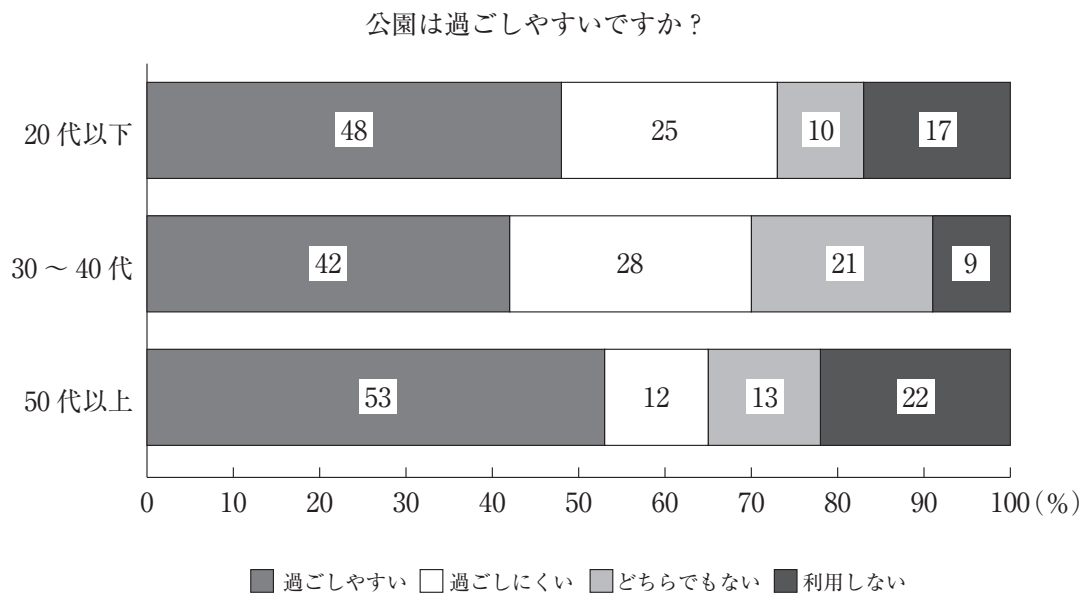
そしてもう1つ重要なのが、「5年ごとに目標を引き上げる」仕組みの導入です。

現状の世界の排出量の増加ペースは、世界の平均気温が4度上がるシナリオに沿っています。さらに、現在各国がパリ協定に提出している削減目標でも、2度未満に気温上昇を抑えるにはまだまったく足りていないのです。まだまだ各国がそれぞれの削減目標を引き上げていかねばなりません。それをどうやって確保していくかという点、これから5年ごとにパリ協定の中で、各国が削減目標を引き上げていくことが決まっています。2020年から始まったパリ協定において、各国が5年ごとに削減目標を引き上げることによって、いつか排出がゼロに近づく日が来るはず、その人類共通の目標に向かって、世界で協力して温暖化対策をやっていることということになっています。

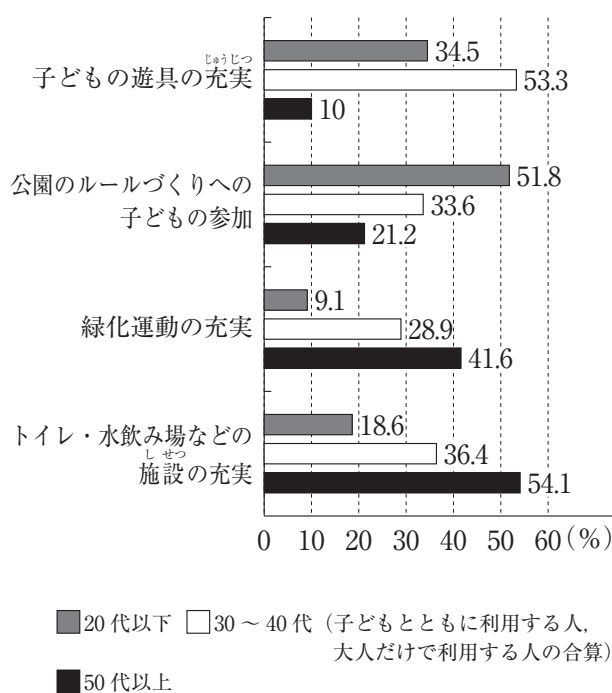
(小西雅子『地球温暖化を解決したい』)

——エネルギーをどう選ぶ?——より)

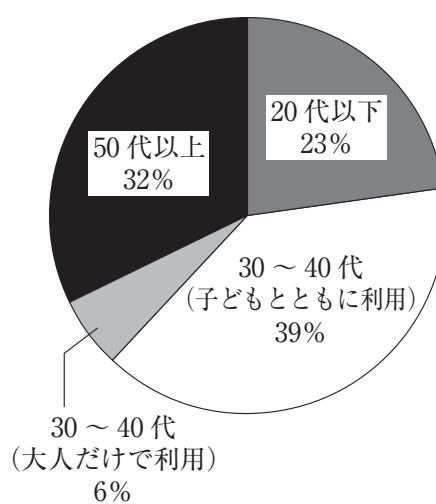
- ※1 2度未満……気温の上昇を2度未満に抑えること。
- ※2 相殺……互いに差し引きして帳消しにすること。
- ※3 温室効果ガス……大気中に含まれる二酸化炭素などのガス。熱を地球に閉じ込めて、地球を温める働きがある。
- ※4 パリ協定……二〇一五年十二月に採択された、気候変動抑制に関する多国間の国際的な協定(合意)。



これからの公園づくりに望むこと



世代別公園利用者数の割合



【意見文】

共生社会の実現のために

一年R組 立命 ケイコ

先日、学校の近くのA公園の整備が行われた。地域の大人たちで構成されている「A公園管理委員会」によって必要だと考えられた、緑化運動やトイレ・水飲み場などの施設の美化運動が行われた。一方で、公園のルールは「危険なボール遊びは一律禁止」とされたままであり、「子ども」というだけで静かに遊んでも地域の人に注意された友人もいる。これは、公園のあるべき姿なのだろうか。このように考えた私は、地域の方々を対象にアンケート調査を行った。

ア

障害の有無、性別や年れいのちがいにかかわらず、全ての人が分けへだてなく暮らしていくことのできる社会を「共生社会」という。私は、共生社会の実現には、自分の持っている「当たり前を疑う視点」を持つことが重要だと考える。

自分の持つ「当たり前」にしばられず、様々な立場から物事をとらえることが、共生社会実現のための第一歩なのではないだろうか。

問

【ア】について、ここでケイコさんが書いたと考えられる内容を、文章の構成や展開に注意して、次の①～③を満たすように書きなさい。

- ① 二文構成で、八十字以上百字以内で書くこと（句読点や記号も字数に数える）。なお、文末は「だ・である」体にすること。
- ② 一文目は「確かに」という書き出しで、【資料Ⅱ】の全ての世代に共通して読み取れることを示すこと。
- ③ 二文目は「しかし」という書き出しで、【資料Ⅲ】からわかる現状の課題を挙げた上で、共生社会の実現のために何をすべきかを【資料Ⅰ】の本文中の言葉を用いて示すこと。